寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

筑前木屋瀬祇園祭 近づく

7月12・13日　今年の当番町は東中町と感田町

今年の筑前木屋瀬祇園祭の開催日が近づきました。開催日は7月12～13日で5月に祇園祭の実行委員会が立ち上げられ、神事・奉納行事等祭りの全般の方針と祇園山笠の制作が開始しました。

今年の一番山の制作はすでに始まっており、一番山は青山で感田町、二番山は赤山で東中町が当番町を務めます。山笠の人形の題材は山笠会館が当番町と協議して決め、制作を行ないます。山笠は、須賀神社正面に建つ「山笠会館」にて、会館の有志と手伝いの方々により制作します。小学生も手伝っており、今年の祭りは例年と少し変わって、当番町東中町が山笠事務所の土地を確保出来ず、木屋瀬宿記念館「こやのせ座」前広場を借用して東中町山笠事務所とします。

青山は扇天満宮下、赤山は感田町の興玉神社下で遠賀川の水を汲み、神社に奉納します。次に、お祓いを受けて山笠会館から山笠と共に事務所に持ち帰り、事務所の祭壇にお供えします。事務所開きの神事を行った後、山笠巡行の開始です。祭り当日の12日は朝9時の花火を合図として、両町の山笠が山笠事務所を駆け足で飛び出します。各町内の巡行、夜の神社への山笠奉納、翌日の両町による集団山笠巡行、追い山、宮入へと祭りは進みます。宮入は祭り最後の行事であり、当番町は山笠を勇壮に綺麗に入れるのを競うのです。

祭りを安全に円滑に行う為に両山笠の運行方法やコースの協議を行う「掛け合い」、山笠巡行時の安全確保や、山笠を引く子供達を見守る「保護係」、通行車両との安全確保を担当する「交通係」がおり、山笠の安全な運行を行います。

山笠事務所では、町内役員が祭り本部との連絡や運行時間に合わせてお茶や水を運びます。賄い担当は山笠帰着時間に合わせて昼食や夕食の準備を開始し、祭り参加者の接待を行います。

こうした、多くの皆様方の力で祭りは成り立っております。祇園祭の無事成功に向けて、皆様方の御理解と御協力を心からお願い申し上げます。

余談ですが、当番町山笠事務所に掲げられる提灯は、中町の坂本家に残された古文書に、慶応3年（一八六七年）11月、今から一五八年前に当時本町三町、新町三町の火消組提灯の色分けのデザインについて揉めたとあります。この時、木屋瀬宿奉行　安田塚之烝、遠賀鞍手郡奉行肥塚次郎右衛門の裁定によりデザインが決まり、これが今の祇園祭の提灯にも受け継がれています。木屋瀬の長い歴史を実感できる内容のひとつです。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部会長　藤　政文

第96回企画展　二川秀臣（ふたがわひでおみ）版画展　唐津街道の宿場町

長崎街道木屋瀬宿記念館では、令和７年６月２２日まで上記の版画展を開催いたします。令和５年度に宗像市在住の版画家である、二川秀臣（ふたがわひでおみ）氏より寄贈を受けた「唐津街道」に関連する版画・スケッチ作品を一斉に公開する企画展となっています。

唐津街道との追分の宿場であった木屋瀬の町並とともに、ぜひご覧ください。

会　期：令和７年4月26日㈯～6月22日㈰
会　場：北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
　　みちの郷土史料館　企画展示室
入館料：一般240円　高校生120円
　　小中学生60円

赤間宿

第22回（最終回）筑前木屋瀬 今昔歳事記

紅屋泰助氏（故　柴田泰助氏）の「筑前木屋瀬今昔歳事記」の第22回目（最終回）です。

今回は、「ひろば北九州」平成23年3月号の行事・風物について、ご紹介させていただきます。

〔田畑も人の心も潤す「裏溝」の流れ〕

水温む岡森用水

木屋瀬の産土神を祀る須賀神社境内の木々にも日に日に春の息吹が強く感じられる季節です。しかしながら、弥生三月は一日恒例の月次祭の他に伝統行事の無い、珍しい月でございます。そこで今回は、水温む季節の風物として岡森用水をご紹介させていただきます。

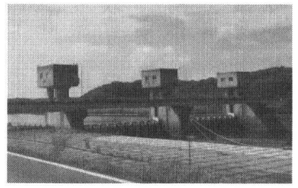
【岡森用水　其の壱】

筑豊の穀倉地帯を貫流する遠賀川は、其の昔、梅雨や台風の増水時には氾濫する暴れ川でございました。このため江戸時代、時の筑前藩主・黒田長政（慶長年間）により治水工事が行われました。しかし、旱魃に際しては、本流に水放が蕩蕩と流れているにも関わらず、取水ができず、農民を苦しめていました。

旱魃による飢饉を無くし農民を守る為、鞍手郡感田村大庄屋・渡辺善吉が郡奉行・嶋井市太夫の助力を得て、岡森用水を完成させました。筑前領で最も川上（豊前領との国境）の岡森（現・直方市）で、彦山川（遠賀川の支流）を堰止めて取水口を設けて用水路を開削。下流域七ヵ村（上境・下境・頓野・赤池・感田・木屋瀬・楠橋）の灌漑用水としました。

仮井手築造の失敗など幾多の困難を克服した末の偉業であります。しかし、川を堰止めた事により、洪水や旱魃が起きる度に、筑前国と豊前国との間で水争いが起き、又、川舟船頭の間で揉め事が絶えなかったそうでございます。

普請は安永元年正月より始め、完成は安永三年夏とあり、築後二百三十年以上を経過しています。しかし木屋瀬驛の繁栄の一翼を担った歴史ある流れは、今なお二百八十㌶の田畑を潤しています。さらに、長崎街道に沿って流れる用水は木屋瀬の街並と一体化し、其の景観で人々の心を潤しているのでございます。



現在の岡森堰

因みに、この普請の重責を担った感田村大庄屋・渡辺善吉は、木屋瀬村笹田の豪家・香月家出自と聞き及んで居ります。

私共が子供の時分、用水の東側には遥か野面の里村まで長閑な田園風景が広がっていました。水辺には猫柳や芹、蓬などの草木が生い茂り、水中には泥鰌、鮒、ザリガニ、アメンボ、ミズスマシ、タガメ、蛭、ゲンゴロウなどが生息。恰好の遊び場でした。旧街道筋の裏手を流れているからでしょうか、「裏溝」という通称で呼ばれていました。

ご来訪の際は、旧街道筋のみならず、岡森用水沿いも併せてご散策いただくのも、木屋瀬の歴史の歩みを知るうえで宜しかろうと存じます。

（記念館）

令和6年度 長崎街道ひなまつり「木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋」ご来場ありがとうございました

毎年恒例の長崎街道沿い文化施設４館連携イベントである「長崎街道ひなまつり　木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋」を今年も開催いたしました。各館特徴のある展示で来館者をもてなし、大変多くのお客様にひなまつりを楽しんでいただきました。

来年も開催を予定しておりますので地域の皆様におかれましては、引き続きご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

シリーズ 文化の薫る町 木屋瀬

第十四回 伊馬春部生家の復元

平成三年十一月三日木屋瀬の街づくりを始めるにあたって、小学校の講堂で「歴史と保存」のテーマでシンポジュウムが開催され「宿場木屋瀬街づくりの会」が結成されました。その後、取り組んだのが街づくりの方向性を決めるべく住民の意向を聞く事です。

連日各町内に伺い約一年間懇談会を開かれ「どんな街にしたいのか」「なぜ街づくりをしなければならないのか」等いろいろな意見が出ましたが、纏めてみると木屋瀬の歴史を活かした文化の薫る町のようでした。意見の中で木屋瀬は何も無いという意見もありました。

平成4年開催の宿場町フォーラム告知ポスター

当時街づくりの会の副会長であった故岩尾太郎氏が雑談の中で木屋瀬は東京では有名であったと語っていました。国学院の同窓である故伊馬春部氏（本名高崎英雄）の出身地であるので文化的に高度な地域と思われていたようで、人物事典を引いてみると木屋瀬出身と記載されている。事典を詳しくみると他にも、木屋瀬から三人の人物も掲載されており東部を入れると四人が掲載されています。

北九州市内から何人かわかりませんが、この小さな町から四人も人物事典に記載されていることは特筆すべきことのようです。名前を記すと、教育学者の野口援太郎、微生物学者の吉田貞雄、浪曲師の天中軒雲月、大相撲で大関まで出世した九州山十郎、等です。中でも、伊馬春部の生家は現存し江戸期の家であることも判明していました。

木屋瀬は何もないことは無い文化的にもいろいろある宝庫であることが分かりました。故伊馬春部氏の生家は改正町内会に寄贈されていましたが、痛みが酷い状態で今にも崩れそうな状態でした。そこで、伊馬春部の生家保存と業績の継承を街づくりの運動として始める事にしました。

しかし、木屋瀬の人達が伊馬春部をよく知らない。そこで、地元から勉強を始める事としました。お寺の本堂や当時あった天理教の本堂等で講師を呼び勉強会を始めました。運動は木屋瀬だけでなく広く北九州市民に知って頂く必要があった。そこで、NHKと相談して伊馬春部とご縁あった女優の中村メイコさんを当時黒崎に有ったプリンスホテルに呼んで講演会を開き、広く北九州市民にアピールしました。市長も参加するようなイベントで大きな反響を呼びました。

この事をきっかけとして、木屋瀬の街並みの中核としての生家保存と業績の継承へ大きく動きだしました。故伊馬春部氏は戦後の混乱期に、国民的人気のNHKのラジオドラマ「向こう三軒両隣り」のドラマを生んだ放送作家であり歌人、劇作家でもありました。昭和五十一年には、宮中歌会始めの召人を務め、又、近隣の学校校歌も数多く作詞されていました。平成二十年九月北九州市立文学館では「生誕百年、伊馬春部展」が開催され名実ともに北九州を代表する文学者となりました。作家梯比呂子氏による、評伝「やさしい昭和の時間伊馬春部」も刊行されました。

生家は、平成6年に最古級の民家として市の文化財に指定されました。屋内には、愛用されたカメラ、万年筆、眼鏡や作詞した学校の校歌や短歌等が陳列されています。又、生家は修復解体し江戸時代の姿に平成9年復元され公開されました。その後、現在にいたるまで市民はもとより全国からの訪問者が絶えません。

目になれし
山みえている曇りそら
橋を渡ればしぐれなりけり
春部

宿場木屋瀬街づくりの会
前会長　野口靖彦

新任職員紹介

館　長　馬場　秀一（写真左）
学芸員　中西　義昌（写真右）

この度、北九州市役所の4月人事異動に伴いまして、木屋瀬宿記念館でも職員の異動がございましたことを報告いたします。今年度から学芸員は2人体制となりました。
今後も運営を通じて地域文化の振興・継承に努めて参りますので、前任者同様よろしくお願い申し上げます。

保存会の活動とは？

私たちは、木屋瀬みちの郷土史料館の入場者で希望する人に、史料館に展示してある史料の解説をしています。会員は、現在14名。年齢層は、60代、70代、80代で、中には90代の人もいます。皆で当番を決めて、毎日一人を配置するようにしていますが、都合で解説する会員が誰もいない時があります。それでも、当番の日は、皆さんボランティア精神旺盛で熱心に取り組んでいます。

「よろしかったらご案内しましょうか。」と声掛けすると、大抵の来場者は、「はい、お願いします。」と同意されます。そこで、館内でどのくらいの時間があるのか聞いて、それに合わせて解説時間を決めていきます。史料館を出るときに、「おかげでよく分かりました。有り難うございました」と言われる時が私たちの喜びです。

ただ、平日では、入場者が少ないときや、一人も来ないときもたまにあります。そんな時は、展示品を見て回ったり、机について長崎街道や江戸時代の史料を読んだりしています。

先日の4月21日（月）には年に一度の総会をしました、前年度の報告と反省を踏まえて今年度の予定を組みます。今回の総会では、馬場秀一新館長と加藤悠学芸員の歓迎会をしました。馬場館長は、爽やかで馴染みやすくすぐに打ち解けて、楽しい雰囲気で盛り上がりました。加藤学芸員も引き続き木屋瀬宿記念館で勤めることになって、皆喜んでいます。

史料館で面白いのは、2階にあるパソコン画面の「象の旅」です。クイズに答えながら象と旅をするのです。この象は、8代将軍徳川吉宗が今の東南アジアから中国商人に命じて日本に連れてきたのです。象を乗せた大きな外国船が直接江戸へ行けばなんの問題も無かったのですが、当時は鎖国政策で外国船は江戸に着くことができません。唯一開港している長崎止まりです。そこから日本の船で運べば良いのですが、日本には象を載せるような船がありませんでした。それで、やむなく象は陸路を行くことのなるのです。象は、長崎街道、山陽道、東海道と歩いて、75日かかってようやく江戸に着きました。その間、象は色々なエピソードを振りまきながら旅をして行くのです。

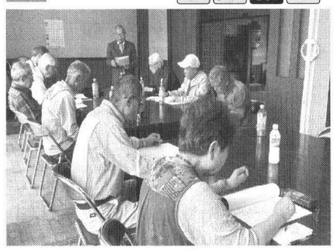
中でも驚きなのが、象が京都で天皇に拝謁する時です。象はお化粧をして白く塗り白象となるのです。パソコンの象の旅では出てきませんが、当時天皇に拝謁するのは貴族や位の高い人に限られているのですから、象にも位が必要だと「従四位」を付けました。この位は、赤穂城の浅野内匠頭の「従五位下」よりも高い位です。当時の格式の面白い処です。思わず笑ってしまいます。

史料館には、この他にも興味を引くものがたくさんあります。長崎街道のスライドや歴史ドラマシアター等盛りだくさんです。これらを丁寧に時にはサラッと解説していきます。

私たち保存会の会員は、毎月1回、展示物や、木屋瀬の歴史等について研修会を実施しています。私たちも、未だたくさん勉強することがあります。会員同士、お互いに話し合いながら史料館の案内に取り組んでいます。

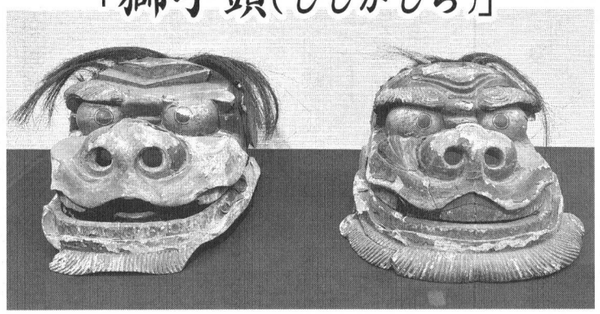
木屋瀬みちの郷土史料保存会
会長　髙倉照男

第1回 みちの郷土史料保存会 活動報告



木屋瀬宿記念館 収蔵品 紹介

「獅子頭（ししがしら）」



現在は当館に収蔵されていますが、元は木屋瀬3丁目にある須賀神社の神事にて用いられていたものです。6世紀頃に大陸から渡ってきたとされる獅子頭は、主に祭礼や芸能などに使用され、現在までその文化を色濃く残しています。雌雄1対で数えられる獅子頭は、その区別を角でつけ、1本は雌、2本は雄となります。当館収蔵の獅子頭には角が欠損していますが、それぞれの頭部の形状で右が雌、左が雄だと判断できます。また、開館当時は写真の品を含めた2対の獅子頭の寄贈を受けており、表面の剥がれや木片の欠けなどが見られない品もありましたが、現在は須賀神社へ返却されています。

（長崎街道木屋瀬宿記念館　学芸員　加藤　悠）